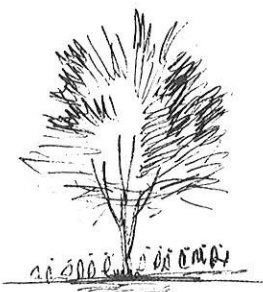


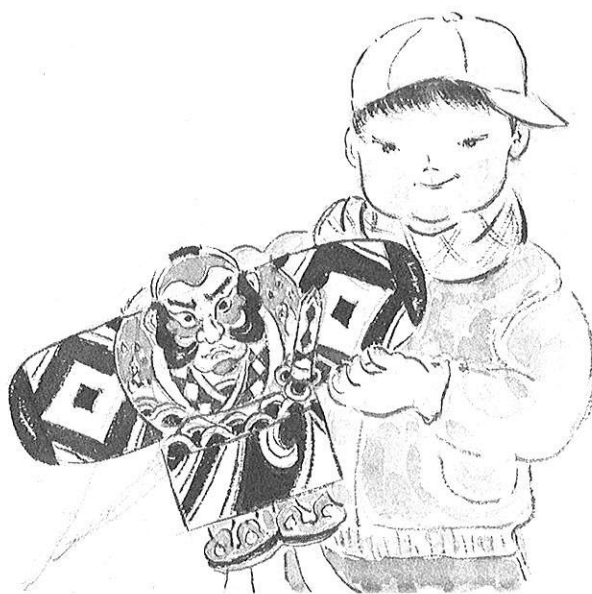
ひかりのこ

光の子



No. 70 1997. 1. 1.

● 主の名によって語り行え (コロサイの信徒への手紙第3章17節)



「飛ばすぞっ！」

謹賀新年

本年もよろしくお願い致します

社会福祉法人 光の子どもの家

12/10

え・中島英子

「山の鳥」

元旦の影を大きく山の鳥
初夢の端踏んで猫通りけり
藁塚に風の出てある二日かな
男らの頸をみどりに山始
寝ね足りし眼いちにち鳥総松
真向ひの山に墓ある年の酒
獅子舞の佇つ村々を見下して

黛 執 (『春野』主宰)

発行／社会福祉法人 光の子どもの家
編集／光の子 編集委員会

TEL／0480-72-3883
〒349-11 北埼玉郡大利根町砂原277

振替／00130-1-128022
印刷／社会福祉法人 共愛会

笑う門には福来る

マタイによる福音書 第25章29節

言っておくが、わたしの父の国であなたがたと共に新たに飲むその日まで、
今後ぶどうの実から作ったものを飲むことは決してあるまい。

理事長 福島 勲

清らかな笑いにつまれた平和な家に福がくる。怒ったり、泣いたり、争ったりしている家には幸福が訪れないということだ。

正月、カルタ遊びなどに興じる若者たちの晴れやかな笑声を聞くと、ついこちらまで浮きうきした気分がさせられる。

ところで笑いというとその内容はさまざま考えられる。他の感情と複合あるいは競合して、泣き笑い、にが笑い、ふくみ笑い、せせら笑い(嘲笑、冷笑) 北叟えみなど。

七・八世紀の人かとも言われる中国の寒山の詩に、自分はいつも人から田舎児といって笑われる。流行遅れだとか野暮たいとかいわれるが、自分は決して時代に遅れているのではない。ただ金がないからだ。金があったら頭上に塔でも建ててやる、と囁いている。

あまり良い詩とは思わないが、笑われるということは、いつの時代でも腹立たしいことである。自尊心を傷つけられ嫌なことである。

この種の笑いで注意すべきことは神の業に対する嘲笑である。

アブラハムの妻サラは、イサク誕生のお告げをうけたとき、老いた自分にそのようなことはあり得ないと神のみ業を心の中で笑った。(創世

記・一八・一二)
天を玉座とする方は笑い(詩編一・四)という聖句がある。

権力や支配の獲得にうつつをぬかし、争い、せめ合いそして神に逆らう人間の愚かしい現実を、神は笑いをもってみそなわされる。

大人びてごさかしく振舞うが常軌を逸している子どもに、いたく憂い危惧する親の泣き笑い、そしてそれが怒りに転じていくにも似て、神のこの笑いは怒に発展し恐ろしい限りである。

愚者の笑いは鍋の下にはぜる柴の音、これまた空し。(コヘレトの言葉・七・六)

喧騒のみの無意味な馬鹿笑い。またその場限りの追従笑いの空しさ。

人はこの笑いが好きなのである。人情の機微に触れて涙しまた笑う小説や演劇の悲劇に涙し、名状し難い快感に慰めを覚える。

笑いは悲しみの陰にひそみ隠されているのであろうか。

ギリシャ悲劇やシエクスピアの悲劇も時代を越えて、人々に喜ばれてきた。不景気になると、欧米ではキリストに関するもの、日本では忠臣蔵が映画や劇で上演されるという。

十字架と腹切りの悲劇である。イエスはエルサレムを眺めて嘆か

れ、ラザロの死に涙された。(マタイ・二三・三十九、ヨハネ・十一・三十五)

だがイエスが笑ったという記述は聖書にはない。

とは言え、イエスの生涯が笑いのなかったものとは考えられない。

(宮田光雄・キリスト教と笑い・岩波新書)

真に泣く者が、まことの笑いを知っている。己が罪に泣き、キリストの救いに喜びをみる者こそ、真の笑いを笑う。

さて、笑う門には福来るというが笑えることそれ自体幸いなことである。そこに福が来るということは聖書の言葉を借りて言えば、「持っている人は更に与えられて豊かになる」ということであらうか。(マタイ・二十五・二十九)

持っている(笑い)ということが自前だとすると、今日のような悲劇的存在のわれわれに、福の来る確率は零に等しい。

福を招くという前提の笑いの前にもう一つの前提のあることを見落してはならない。キリスト・イエスへの信仰である。この前提を確保するとき、たとえこの世で福なるものが来なかったとしても、すでに窮極の祝福が約束されているのである。

エッセイ

いちようの落葉

「黄落」と言う言葉がある。コウラクと読むという事だ。この言葉がびったりするのは秋、というよりむしろ冬であらう。黄色く色づいた木の葉などが落ちる、或いは落ちている状態で、古来日本人が伝統的に愛し続けて来た、寒さの中の美しい自然である。

寝室の端にある机の所に腰をおろすと、窓の外に一面に散り敷かれた銀杏の落葉が目に入る。まさに文字通りの黄落である。びっしりと何層にも積み重なった落葉は、きれいに均されていて、人も動物も全く通った形跡がない。それもその筈で、以前は家の西側にあった納屋が、余りにもひどく、つぶれそうになってしまった為に、今年の五月、取り壊してしまった。したがって、銀杏の落葉を踏んで納屋へ通う必要がなくなったものだから、誰もそこを通らないのである。黄色い葉っぱは落ちたまま、そっくりそのままなのである。その光景は本当に素晴らしく、ずっとこのままの美しさを保存しておきたい様な気がするのである。ちょうど、美しく降り積もった雪が解けて

しまいのを惜しむ心境だ。

私が子どもの頃には、近所の友達と一緒に遊んで、この黄色い落葉の上で遊んだものだ。都合の良いことに、みんなで遊べる程度の小さい空間が、山茶花や石灯籠などに囲まれてあって、そのあたりが特に厚く葉っぱの積み重なったところだった。

銀杏の落葉はひんやりと冷たく、気持ち良く手足に触れた。私たちはたあいもなく、この上を駆け回り、葉っぱを両手でかき集め、一斉に上に放り投げて、それを頭から全身に受けてみたり、そんな事をして時を過ごした。それは、殆ど意識もなしに、黄色い美しい葉っぱと一体になるようにしていたものかもしれない。そうする事によって、有り余る程の自然の中で、その自然を自分のものにしていったのだ。毎年毎年冬になると、同じ様に決まって私たちは落葉と戯れていた。しかし、これが必ずしも百パーセント楽しかったわけではない。こんな中であつて子どもながら、季節の移ろいを感じていたし、やがて来る雪や未来に対する漠然とした不安も抱いていた。

私は、かつて、次のような散文詩みたいなものをつくった事がある。思い返すのも恥ずかしいキザなものだが。

“あなたは、いちようの落葉の散る、秘やかな音を、聞いたことがありますか。

樹木の高い枝に、ひっかかり、ぶつかりながら、大量の黄色い鳥が舞い降りるのを、見たことがありますか。

大木の根本のジジゲも、枯れかかった野水仙も、みんな埋めつくした厚い落葉のしとねの上で、すわたり、転げまわったりしたことがありませんか。

そして、やがてやって来る寒い冬を予感して、その、言葉にできない淋しさに、戦ったことがありますか。

これは、あの頃、子供の頃の偽わらざる心境である。楽しみつつも不安を抱えて、未来への希望と同時に恐ろしさも見つめている。臆病で、思い切った踏み出しのできない自分の性格が、感じられる。

ところが、その臆病な人間が歳を

県立高校美術教諭 中島 陸雄
経ると、その様な一面を隠してしまうことがある。

学校での事だが、卒業生を送る予餞会があった。音楽を担当するNさんと、書道のYさんに美術の私という三人で二十分ぐらいをもらってミニコンサートをやったのである。YさんはNさんのピアノで歌をうたい、Nさんはピアノを弾きながら、その美声を披露した。私は、散文詩の朗読である。

Nさんが、思い入れたっぷりに、”枯葉”の曲を弾いた。その曲に乗せて私が、さきの”いちようの落葉”を読むのである。”あなたは、いちようの落葉の散る秘やかな音を、聞いたことがありますか・・・”思い切り真面目に、そして徹底的に聞き直して三人とも、すっかり乗っていた。今思うと、実に恥ずかしい事である。寝室の端にある机の上に頬枕をついて、ぼんやりと外の黄落を眺めていると、ついつい思いが逆もどりにしてしまう。

真黄色な筈の葉っぱが、すっかり色を濃くしてしまつたようだ。

2つの文化に生きる

4

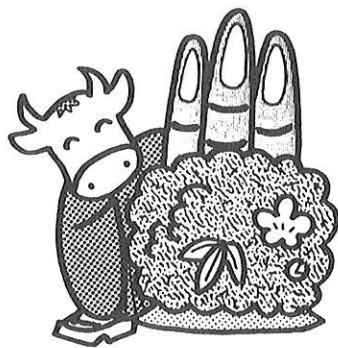
日本キリスト教団東大宮教会
バーガー 京子

新しい年を迎えて心も新たに希望で一杯である。私の新年の抱負は「私にできることは何ですか。」と神様、そして自分自身に今年も問い続けることである。去年から書かせていただいているこの「二つの文化に生きる」のコーナーは、私自身の今の生活振り返る良い機会を与えて下さり、何気なく生活している日々の節々で、ちょっと立ち止まり「考える時」が与えられている。以前から何らかの形で書き記したいと思っていたことが、こういう形で表に出させていただいていることは思いもよらなかった喜びである。お声をかけて下さった菅原先生に心から感謝して、今年も「立ち止まり、考える生活」を楽しませていただきた

と思う。
早速気になっていることが一つ。今は日本語になってしまっているのかもしれないが、英語でステレオタイプと言う言葉がある。これは「型にはめる」という意味で色々な先入観や偏見の大元となっている。例えば、サラリーマンといえばスーツ姿、お母さんと言えばエプロン姿、おばあちゃんといつも優しく着物着が似合う等々ある。異文化に目を向けてみると、日本人が持つアメリカへのステレオタイプは背が高く鼻も高く瞳はブルー髪はブロンドである。アメリカにも背の低い人、髪は黒い人、鼻の低い人と様々いるのだが、なぜかその人たちのことは話題にならず、背の高いアメリカ人を見ると「ああ、やっぱりねえ。」ということになる。食生活でもステレオタイプはある。私がいく美容院の美容師さんはアメリカの生活や英語にとっても興味をもっていて、いつも色々な質問をする。私も異文化を伝える為だと思っいつも丁寧にお答えする。先日日も会話がはずんで「やっぱりバーガーさんのお宅では肉食が多いんでしょうねえ。」私はそれ来たとはかりに、「うちはあまり肉の塊っていうのは食べないんです。ステーキなんて年に一回食べたらい方です。」

と答える。夫はお豆腐もお味噌汁も好きで、という話をする、これは意外という顔をする。それから二言三言会話を交わした後の窮め付けは「納豆はどうですか？」である。夫は納豆は臭くて食べないというやっぱねという顔。納豆の嫌いな日本人は全国で山程いるのだが、外国人が嫌い、という所にステレオタイプの面白味がある。逆に納豆の好きな外国人がいたら所謂「変な外人さん」ということになる。生活の中で面白いステレオタイプの話がある。見知らぬ外国人を見ると日本人は英語を話さなければいけないという衝動にかられる。ある時、外国人が道を尋ねるために日本人青年に日本語で声をかけた。その青年はドギマギしながら「僕、英語話せません。」とそそくさと逃げて行ったそう。日本語で聞かれたから日本語で答えればいいものを顔を見ただけで英語と決めたってしまったい例である。何年前に初めてアメリカ旅行した母が道を尋ねられる経験をした。「私は日本人だし、英語もほとんどわからないのに。」とその時母は不思議がっていたが、人種はゴチャゴチャ、住んでいる人は英語が話せてあたり前のアメリカでは普通のことだ。反対に日本で外国人（特にヨーロッパ

系）に日本人が日本語で道をきくという光景は私は未だかつて見たことがない。とにかくそのアメリカで今年クリスマス新年を迎えている。年に一回アメリカに行けるなんて裕福ね、と言われることがあるが、これは我が家にとってぜいたくでもなんでもない。子どもが生まれてから必要最低限のこととして夫婦で実行してきた。二つの文化に子どもを触れさせること。普段は日本文化に囲まれて生活している子どもたちを年に三〜四週間どっぷりとアメリカ文化に浸す。おかげで貯金というものは縁遠くなってしまうが、今を精一杯生きているバーガー家の象徴だと思っている。そして、何よりも、アメリカに帰ると伸びきったゴムの様になってくつろいでいる夫を見るのが私の楽しみになっている。



なにか不気味な世の中である。O-157の集団発生は記憶に新しいところだが、じつは最近急が増えてきた感染症、あるいは以前に流行していたが、下火になってほとんど消えかかっていたのにまた増えてきた感染症など、O-157のほかにも

山形大学医学部教授
仙道 富太郎

O-157とベル友

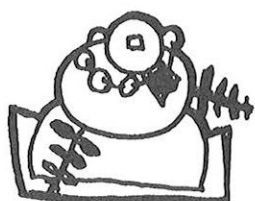
学者もどきのつづき ②

多くの感染症が世界的に問題になっている。専門的な言葉では、emerging diseases と言う。日本のお役所で、の訳が新興病、再興病と言うのだそうだが、なんとも変な訳ではある。ともかく、なんでもこのようなことが起きてきたのだろ

うか。抗生物質の発見で人間は感染症を克服したと考えていたが、それは奢りにすぎなかったことが実証されてしまった形である。クリプトスピロジウム症という下痢をおこす感染症の集団発生がアメリカなどで問題になっているが、その多くの流行

は水道水によるものと言われている。奇妙な現象だと思いませんか。発展途上国で、水道が設置されたばかりで管理が十分でないためにクリプトスピロジウムが水道水に混入したかもしれないということなら、話は分かりやすい。しかし、世界に冠たる文化の発達したアメリカで水道設備がそんなに急に劣化するとも思えない。最初に不気味だといった理由がここにある。最近急に増えてきた感染症の集団発生の原因のなかに、多くの場合、なにかはつきりしない部分が残されているのである。O-157の騒ぎのときも厚生省は「疑わしい」という表現で、かいわれ大根に罪をなすりつけたが、この結論自体私は大変疑わしいといまだに思っている。

どうしてこのようなことが起きるようになったのだろうか。勿論、現段階では、誰も証拠を把握している人などいない。しかし、私には、文明が急速に発達し過ぎてしまったことが原因の一つのように思えてならない。つまり、我々人間の営みが地球の環境を変え、その一つの結果として生態系が大きく乱れてしまったために、従来は一定の制御を受けていた生物間の関係が攪乱されてしまい、ある特殊な生物だけが異常に繁



プ・リ・ズ・ム

子どもたちの季節 仙道家

新年明けましておめでとうございます。本年もよろしく願いいたします。

光の子どもの家では、誕生会が2回ある。一度は全体でのお祝い、もう一度は家で開かれるその子だけのための誕生会だ。

先日、私がここに来て初めて担当している子どもの誕生会をすることになった。その日の十日以上も前から、メニューは？どんな雰囲気になろうか、プレゼントは？など、少しドキドキしながら楽しみに考えていた。誕生者の詩美のリクエストによって、フライドポテトと母のショートケーキと決まった。同じ家の珠弥がフライドポテトを作ってくれると言ってくれた。また光の子どもの家で一番ケーキ作りの上手な姉の悠子は、ケーキのデコレーションを引き受けてくれた。その他何品かを私が考えメニューの完成予想図を書いた

り、前日に行き、忙しそうに当日にすることをメモしたり、ランチョンマットを作ったりなどかなり気合を入れて臨んだつもりだった。

しかし、前日に最も便りにしていた悠子が三十八度の高熱を出して寝込んだ。私の予定に不安がよぎった。それでも前日に仕込みをしながら何とかなるだろうと高をくくっていた。

当日は午前中に職員会議、午後には大事なお客様と、その間隙を縫って走り回った。生クリームを泡立ててくれた環君、ケーキのデコレーションを見事にしてくれた溪子ちゃん、じゃがいも十二個分のフライドポテトにコロッケまで作ってくれた珠弥ちゃん、司会をしてくれた一志君など、それに祐子・恵理両保母に助けられ、お客様の智子保母にはおつまみの差し入れまでしていただいた。お父さんお母さんやお友だちも揃って、とても楽しい誕生会を無事終えることが出来た・・・と思っていた。すっかり片づけ終えて厨房へ行ってみると、何と！オープンの中にチキンが真っ黒になっているではない

か！盛りつけ用の皿が空しく調理台に並べられたままで・・・。

次回こそ、きつと！。藤本 曜子



原田家日記 一折りー

明けましておめでとうございます。本年もよろしく願い致します。

ある日、将司の万引きを告げられた。彼には以前にも万引きがあった。お店に将司と一緒に謝りに行った。店主は盗んだ品物の代金を受け取り、「勉強、がんばれよ。」と、将司を励まして下さった。名前も学校も聞かないと言っても下さった。

私はうんと叱られ、あるいは怒鳴られもするだろうと覚悟をしていったので、どうせなら親代わりの責任を負っている私を責めて欲しかった。万引きについての厳しい取り扱いを

将司と一緒に体験したかった。

しかし、時代がそうなのだろうか、さらっと私たちを帰してくれた店主さんは、どうお考えなのだろうか。

将司の万引きについて私たちはもっと考え、彼の心の在り様を理解しなければならぬと思った。

万引きは悪いことである。罪である。中学生の将司は私の知らないところでもたくさん罪を犯しているに違いない。その上、将司はそうすることが悪いことだということを十分知っているのだ。

罪を犯した将司だけが悪いのではないだろう。万引きしなければならなくなるような心になってしまいう生活全体のどこかが欠けているのだ。それは、買い取った万引きしてき

たものが、とても欲しいものではなく、あげると言っても手にすることがなかったことでも分かるのだ。時間がかかるだろうが、生活を一緒にしている者どうしが真剣に考えて、万引きなどしなくてもいいような生活を創りあげていかなければならない、と強く思った。木部すなお

河のほとりで 旗井の家

謹賀新年。

この夏以来光の子どもの家全体の高校生の生活が乱れ、触法寸前の行動に悩まされていた。旗井の家はいち早く立ち直り、中学生以上を集めてする話し合いにこのところ参加することはなくなってきた。

私の目から見ても見直さなければならぬほどの生活の乱れというものはない。

もちろん旗井の家でも子どもとのトラブル続きの時もあった。

しかし、数カ月前、菅原先生から「お前が旗井の家の親方だから、私がいけないときはみんなをきちんとさせなければならぬ。」と、高一の嬉に言い渡されてから、彼に学校でも家でも落ち着きが出てきた。それと前後しながら中二の勇が部活をがんばり出した。そんなことがきっかけなのだろうか、旗井の家全体が上向きのムードになってきた。それぞれがここでの生活を楽しめるようになってきたのである。そして、グループ意識もかなり強くなってきた。

中高生の話し合いに出なくてもいいという話を伝えると、「旗井はちゃんとやっているって言われるように、

これからがんばろうな」と勇。

それを聞いてうなづく嬉。子どもたちの中に、良い意味で『本家とは違う』という思いが育ってきているようだ。

先日子どもたちに「旗井には指導員がいけないけど、いてくれるか」と思わないか？」と尋ねた。

すると、「別に。」と千沙。「菅原先生が時々ご飯を食べに来てくれるばいいな。」と亜季。「勉強を教えてくれて、運転してくれればいいよ。」これは勇。「親方（自分）がいる。」と頼もしい嬉。

どうやら今のところ、子どもたちには指導員なしでやれそうな思いがあるようだ。

グループホームという本家から離れた場所での少人数での生活は、ともすると排他的になり危険だと思っただが、逆に考えればそれは、私を含めたグループの仲間意識が強化されてきている・・・ということなのかも知れない。

倉沢 智子



光の中で 佐藤家

たかきとの会話

明けましておめでとうございます。皆さまの上に祝福が豊かにあります。すようお祈りいたします。

四歳のたかきの両親は、月一回のペースで面会に来る。両親が帰るたびに大泣きの兄弟である。

私が洗濯物を取り込んでみると、「ねえ、かんだたん。」とたかきが窓からちょこっと顔を見せた。

「なあに？」

「パパとママがいなかったとき、かんだたん、えーん、えーんて、ないていた？」

「うーん、泣かなかったよ。」

「どうして？」

「おともだちがいたから。」

「ふーん、じゃあ、おともだちがいなとき、かんだたん泣いた？」

「泣かないよ。」

「どうして？」

「神さまがいるから。」

「ふーん」

「神さまって、どこにいるの？」

「うーん、見たことないけど、たかきのそばにいて、いつも守ってくれ

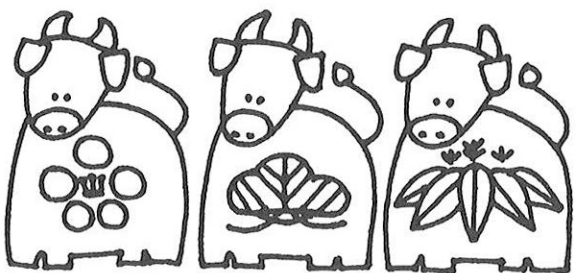
るんだよ。」

「ふーん」と、にこっと私に笑いかけた。

空を見上げると、青い青い空が、すっと広がっていて、本当にきれいだった。

神さま、どうか、この子をお守り下さい、と、心から願わずにはいられなかった。

今年こそ、と心に固く思います。でも、また忘れてしまうかも知れません。覚えて下さって祈りいただけるよう、どうか、今年もよろしくお願い致します。 神田 幸枝



現場から

のびやかに ふくよかに

IX

笹山 恵理

明けましておめでとうございます。今年も皆さまのお心をたくさんお受けして、子どもたちと一緒に新しい年を迎えることが出来ます。心から感謝申し上げます。

誰にとってもより一層豊かな一九九七年になれますように、実現に努力しようと思いを新たにします。今年もよろしくお願いいたします。

さあ新しい年！濁ってきた思いをきれいにし、新しく出発しよう！暮らしも一新！などと、決意ばかりが先走っておりますが、新年早々「暮らし」という言葉に立ち止まってしまいました。暮らしって？・・・

一言で暮らしといってもその内容は言い尽くせるものではありません。それをどう捉えるかは、光の子どもの家で働く私にとって、窮極の課題の一つと言っても言い過ぎではない。

まあ、私は光の子どもの家に「働き手」としてあるので、どう働くか、どう暮らすのかは日々迷っていて然りなので置いて置くとして、子どもたちの方を見てみましょう・・・

ているものの一つに、基本的生活習慣があります。なぜ重要とされるのかは、それが心の問題に直結しているからでしょう。

ある日、三歳の美季ちゃんとテープを聴いて遊んでいると、こんな音楽が流れてきました。

元気でいること元気の素は
簡単そうでもとても難しい
基本があるのさちよつと聞いてよ
早寝・早起き・歯磨き大好き
好き嫌いなし何でも大好き
うがい手洗い・お風呂も大好き
ここで言われている元気とは、まさに体の状態についてだと思ふのですが、その時は心の元気について歌っているものと捉え、いたく感動したのです。

そしてまた、はたと考えました。ここで歌われているような内容の、基本となる生活をしたり、しなかったりする人がいるのは何故なのか？ひとつ思い当たるのは、基本的に整った生活をしよう！という気になれる人は、まさに体よりも先に心の元気な人なのでしょう。心の萎えている人は、整った生活をしようとか自分

から何かしようと言う気を持つのは難しいのです。

心の萎えているー心の安定していない状態になる要因を少なからず抱えた子どもたちの寄り集まって暮らし光の子どもの家では、この元気の素が見失われることしばしばです。

たとえば、長い間担当していた保育の退職に見舞われた珠弥。それは肉親との離別と同じようなことだったはず。加えて、ほとんど関わりを持たなかった別の担当者と四月から暮らさなければならぬのです。その心の様子は誰の想像も追いつかないものだったでしょう。元気の素などどこを探しても見つからないし、見つけようという気にもなれなかったに違いありません。朝起きること、布団をあげる、学校へ行くことから服装、言葉遣い、家の一員となること、自信を大切にすることさえ「基本」の揺らぎの中での暮らしが続いたのです。

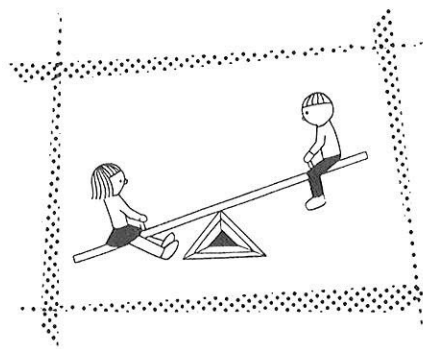
「元気でいること元気の素」は、それを支える環境などがあって初めて当たり前のように言えることなんだなあと、そしてそれが保障されて初めて、暮らしも始まるのだと、こんな当たり前のことを私は珠弥から知らされたのです。

こう考えると、美季ちゃんと聴い

た歌は、一方的で少しノウテンキだなあなどと、つい悪口を言いたくなってしまう。

さて、その珠弥。珠弥自身の努力や忍耐など、より良くなるための力と時間で、元気の素がぐんぐん動き出し、今はとてもはつらつと生活しています。今日はこの原稿の締切を怠惰で延ばし、人様に迷惑をかけまくっている私に「早く原稿やっちゃいなよ」とゲキを飛ばし、獅の照り焼きの夕食を一手に引き受けて腕を振るって作ってくれました。出来映えは私をはるかに越えたもので、みんなおいしく食べました。

こうして、毎日の暮らしの中で、私は子どもたちによって働くこと、暮らすことを教えられ、新しい年の初めに、「新たな出発」を心深く誓ったのです。



ければ多いほど不満は比例して多くなる。当然自分が出ることを大人に依存しているから、もっとやってくれるべきだという欲求が膨れ上がり、そうでない不満が積み上げられるのである。

いつも洗濯一切をやっていた保母が忙しくて、「これくらい自分で洗ってら」といわれた中学生がその保母に殴りかかったということが数年前にあった。もし彼がいつも当然出来る洗濯をしていて、ある日、保母が何かのついでに洗濯をしてあげたなら、きっと彼はありがたく思ったに違いないのである。自立の度合いが高ければ高いほど、感謝などの情緒が生起するのである。

「お父さんに買ってもらったファミコンも使えないし、泊まりに行くこともできないからつまらない。」と言う潔に、そんなつまらない生活だったらやめて、ひとつこれからは自分で生きていくことを考えたい。丁度義務教育も終わるし、これからは君が生きていく方法を選択できるのだから。と、言い渡した。もちろん、彼が生活の主体者としての認識を獲得させる手だてとしてだが、自立をかちとる訓練の過程でこそ、親子や家族の情緒は豊かに生成され人との絆が強くなるものである。

養護メモ 65

家族 その二十『情緒19』

菅原 哲男

第二土曜の夕方、「鷹貴君のところに泊まりに行きたい、いい？」と潔が担当保母の信恵に聞いてきた。「どうして？、今どういう時だか分かっているのかな？」と、高校受験を前にしていることを言外に信恵は答えた。「同じ敷地だし、いいじゃんか。行ってもいいだろ。」「わたしはそうは思わないよ。」

そしてついに、「それはあなたが自分で決めることだよ。もう自分で考えて好きなようになさい！」「んじゃ好きにするよ！」と、潔は鷹貴のところに行ってしまった。

仙道家では、鷹貴の部屋に泊まりに来た潔と鷹貴が友だちから借りてきたというファミコンゲームに興じていた。因みに光の子どもの家はファミコンゲームは原則禁止している。

指導員の祐介が、「お前何をやっているんだ。ゲームをやっている場合なのか！第一、好きなようにしなさい、と言ったのは、信恵さんがお前によく考えて欲しかったからなんだよ。鷹貴のところに泊まっていた、という意味ではないことはお前だっ

りなさい！」と、命じるが、「信恵さんがいいって言ったもん」と、潔は頑として言い張り、動こうともしない。そんなやりとりの最中、鷹貴がいきなり、「潔、がんばれ、オレが助太刀するからな。」と声をかけた。潔は勢いづき、「お父さんに買ってもらったファミコンも使わしてくれない、その上、友だちのところに泊まることもダメだなんて、ぜってえ我慢できないよ。」「それは違うだろう。お前さんの寝る場所がちゃんとして、その上、信恵さんが承知していないこともあるんだから・・・」

「と、反撃する。「信恵さんはいって言ったもん。」と動かない。「ダメなものダメ、帰きなさい！」すると、気短の鷹貴が怒ってしまいそこら辺にある家具や襖などをたたき壊す騒動になった。

一般に思春期の子どもたちにはいような不満が充満していて、いつでも一触即発の状態にいる。そして、養護施設の子どもたちの不満は質量ともに普通の生活をしている子どもたちに比して濃度が密で高いのである。とりたててことを起こそ

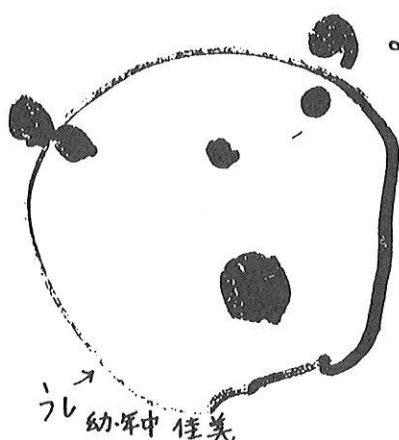
うとしていたのではないが、些細なことで大騒ぎに発展する。

暮らしの全てを保護されている子どもと、家族や大人との関係は時に危機的状況になるのは養護施設に限ったことではない。

多くは充満している不満は容易に着火し、爆発する。

日常的に大人によって保護されている子どもたちは、大概自分の出来ることさえ殆どしようとせずに大人にやってもらったことが多い。当然自分が出ることを自分とする、というのが自立の内容である。出来ることが増えていくことが大人になる道筋なのである。

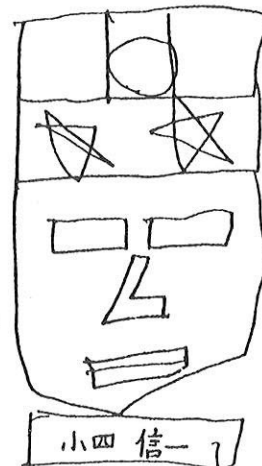
戦後の混乱と物資の欠乏時代を耐えて努力してきた親たちが、自分の子どもにはこんな苦勞をさせたくない、と、子どもたちに耐性を身につけるための訓練の機会を奪って育ててきた。それが子どものためだという信仰にも似た誤解の中で。そして、そう育てられた子どもたちが今親になり、当然、自分の子どもには苦勞をさせてはならないと思ひこんでいるのだ。そう育てられている子どもたちが大半の世の中である。だから、いつまでも親が面倒を見てくれるものだとアブリオリに信じ込んでいる。生活の中で依存している部分が多



ふれ 幼年中 佳美

。言葉賀新年。

子どもたちに「お正月といえは？」
と尋ねてみました。
最初は黙っていただけ
1人が「やかん！」と叫ぶと
「お年玉。」「もち。」「こま。」
と口々に皆が言いまわす。
皆が、楽しいお正月を
迎えられるように。



日誌抄 = 暮らしの風景 =

1996年10月1日 ▶ 11月30日

10月 幼児 5名 (幼稚園 1名) 小学生 10名 中学生 10名
高校生 5名 在籍総数 30名 (男 16、女 14)

1日 中・高生の生活の乱れると社会生活も乱れることを
経験し反省して始めた二学期が、なかなか生活が立
直らない。中学生以上の子どもたちと話し合い。馴れ
てくるとダレてくると子どもたち。職員もそれを防
げなかったと反省。生活のやり直しを確認。

5日 大利根富士幼稚園運動会。年中組の佳美がお遊技に
かけっこにがんばる。

9日 赤十字奉仕団・光の子どもの家後援会共同の環境整
備ご奉仕。きれいになりました。感謝。

18日 大利根・北川辺陸上記録会で珠弥がハードル第三位。

20日 大塚東一氏より野菜・植木などを。感謝。

21日 栗橋タカラブネさんよりシュークリームをたくさん。
おいしかった。ありがとうございました。

24日 熊谷児童相談所事例検討会。困難な家族へ協力して
の関わりをお願いするが・・・どうも・・・。

27日 熱烈ご支援のバーガー京子氏より衣類を。感謝。

29日 中三の桐島潔の父死亡の報。関わりのある者たち
や児童相談所へ連絡。

30日 近親の者と市役所、福祉事務所、竹花、穴水、菅原
が参列して弔意を。無縁仏として葬られる手続きに
潔が泣いて何とかしたいと言ってくる。遺骨を光の

子どもの家に持ち帰り、東大宮教会に相談するなど
して手厚く取り扱うこととなる。

11月

4日 第48回理事会開催。第12回感謝の集い。前日までの
悪天候が爽やかに晴れ渡り、この集まりの祝福に感謝。
第1部福島勲牧師の説教をもって感謝礼拝を捧げ、第2部
祝会を今関公雄理事の司会で開催。長年に渡るご支援の
富士松廣祐氏に感謝状を送呈し、島田徳三町長・栗原
関也大利根町議会議長・江口敏一関東福祉専門学校
準備室長のご挨拶などをいただき160名を超える人々の
参集で盛会理に終わった。

7日 東葛看護専門学校より18名が見学に来訪。

9日 桐島潔の父の葬儀を東大宮教会で山ノ下恭二牧師の
司式でしめやかに執行。痛切の思いとどめえず。

18日 町内道目の篠崎氏よりミシンをご寄贈いただく。

19日 国際婦人福祉協会より、各国大使夫人や上条千鶴子
氏など10名が来訪し見学と懇談のひとつき。

24日 収穫感謝の日。これまでもご支援をいただいている
日本キリスト教団岩槻教会より果物や野菜を沢山。

25日 光の子どもの家後援会役員による12回目の手打ち蕎
麦会が。おいしかった！感謝。

この年も思春期の子どもたちに悩まされ、しかし確実な成
長に感動しながら終わりました。本年もよろしく！（くら）

/// /// 反 射 光 /// ///

☆賀正☆出口のない閉塞状況は今年も
続きそうですが、社会的経済的肉体的
精神的など最も弱い子どもたちを中心
に据えた方向性を見失わずに歩みます
☆子どもたちの権利条約批准以来、最善の
利益を子どもたちにとりという声は多くな
りました☆その限りでは前進かなと思
います☆しかし、何が子どもの最善か、
権利とは一体何かなどの基本的具体的
なことどもの合意は何にもないまま、
国は児童福祉法の改正、地方自治体は
エンゼルプランなど、特に本県は行政
の幹部が県議会で約束をしたこともあ
り、どこかで聞いたような「子どもの
権利ノート」(仮称)の作成を急いで
います☆そしてそれへの危機意識や緊
張感など微塵もないばかりか手を貸す
養護施設のこれからは一体どうなるの
だろうか不安になります☆ともあれ、
どんな状況としても目前に子どもたち
は生きています☆そこから目を離さず、
七五〇〇名の本誌読者の声援を背に、
是は是、非は非として共苦を避けませ
ん☆本年も、乞う、ご支援！（哲）